

吉備国際大学
社会福祉学部研究紀要
第11号, 93-102, 2006

福祉系大学生における障害者観の変容 ～学年差の横断的検討～

中山 哲哉、向井 通郎

**The transfiguration on the view of the handicapped which welfare university students have
～A cross-sectional study about the difference between the grades～**

Tetsuya NAKAYAMA, Michio MUKAI

Abstract

This research gave a cross-sectional study about the difference between the grades on the view of the handicapped which welfare university students have. We asked by using the questionnaire about the prejudice / acceptance of the handicapped. The investigation objects were welfare university students and, the breakdown, students of a first grade were 54 people, and students of a fourth grade were 79 people. That main result was as the following. The feeling of the symbiosis of the handicapped which the students of the fourth grade have was better than that of the students of the first grade. Then, the degree of acceptance of the handicapped which the students of the fourth grade have was higher than that of the student of the first grade. In other words, the view of the handicapped which welfare university students have could be thought to transform in the favorable direction during being at university. From now on, we will have to clear it about the factor which exerts effect to the transfiguration on the view of handicapped by the longitudinal method.

key words : view of the handicapped, welfare university students, feeling of the symbiosis, degree of acceptance, favorable direction

キーワード : 障害者観、福祉系大学生、共生感、受容度、好意的方向

1 問 題

今から4半世紀前の1981〈昭和56〉年は、国際連合が設定した“国際障害者年”であり、「完全参加と平等」のテーマのもとに、世界各国でさまざまな活動が展開された。このテーマの意味するところは、障害のある人々が、それぞれの住む社会におい

て、地域生活にも社会の発展にもほかの市民と同じように完全かつ十分に参加することであって、単に傍観者としてやお客扱いされるようなものではない参加を意味した¹⁾。

一方、わが国の障害者福祉も、“国際障害者年”を契機に大きな転換を遂げ、1993〈平成5〉年12

月、“心身障害者対策基本法”が“障害者基本法”と改正され、その目的に「障害者の自立と社会参加の促進」が謳われた。そして、本法の理念を具体化する“障害者プラン～ノーマライゼーション7か年計画～”(1995〈平成7〉年)では、障害や障害のある人についての理解を深め、「心のバリアを取り除くために」、ボランティア活動などを通じた障害のある人との交流の重要性が盛り込まれた。

ここでいうところの“心のバリア”は、障害のある人に対する偏見や差別などの「意識上の障壁」²⁾であり、障害のある人となない人がまったく異なった存在であるかのように思いこみ、相手の立場に立って考えたり行動できないことに起因している。このような受け入れる人々や社会のもつ偏見と差別などの障害者観は、障害のある人が社会参加していく時直面する最大のバリアで、しかも除去しにくいものと考えられる。また、個々人がもつ障害者観は変容し、その総体としての社会の障害者観も変容していき、さらには、同じ社会であってもさまざま複数の障害者観が存在するとみなされる^{3,4,5)}。徳永⁶⁾は、個々人及び社会がもつ障害者観の変遷について、“障害者白書”^{注1)}を参考に整理しているが、それを要約すると次のようになる。

(1) 無知・無関心

基本的で初歩的なものが、無知と無関心による偏見と差別としての障害者観であり、今日でも残る考え方と意識である。

(2) 憐れみ・同情

次の段階は、“かわいそう”、“大変だね”、“気の毒”という憐れみと同情の障害者観で、優位な立場をとる意識や態度である。

(3) 共生

障害者は、“特別な存在”でなく普通の市民であるという障害者観で、共に生きていく仲間であるという意識・態度である。

(4) 個性（オリジナリティ）

“共生”をさらに進めた考え方であり、障害があることを“個性”（その人らしさ）として肯定的に捉える意識や態度である。

こういった障害者観の変遷は、換言すれば、個々人における障害のある人に対する理解が深まり、受容が増していく段階であって、その違いは、個々人がどの段階の感覚で認識し、行動しているのかという次元上の区分⁷⁾と考えられる。したがって、障害のある人の社会参加を促進するためには、個々人において障害者観の変容が図られることが肝要で、個々人の障害者観はどのように変容していくのかが明らかにされなければならない。とりわけ、福祉専門職を志す大学生の障害者観は在学中、いかなる変容をみせるのかが明らかにされることは、福祉系大学の専門教育にとって、極めて意義深いことと思われる。そこで、本研究では、福祉系大学生を対象として、その障害者観の変容の様相について、横断的に検討することを目的とする。

2 方 法

(1) 調査方法及び内容

質問紙法を採用した。調査内容は、障害のある人に対する偏見及び受容と思われる意識や態度として、浅井⁸⁾の作成した項目をもとにそれぞれ9項目ずつ、計18項目（表1-1～1-9、表2-1～2-9参照）を選定した。質問項目への回答は、「とてもそう思う」、「ややそう思う」、「どちらかといえばそう思う」、「どちらかといえばそう思わない」、「あまりそう思わない」、「まったくそう思わない」と6段階で求めた。そして、その質問紙調査（他の内容からも構成された）は、授業時に集団法で実施した。

(2) 調査対象

岡山県内大学の福祉系学生1年生54名、4年生79名 計133名

なお、4年生が前年次に経験した社会福祉実習の

実習先内訳は、障害者・児施設：29名－36.7%、障害児施設を除く児童福祉施設：4名－5.1%、高齢者福祉施設：22名－27.8%、機関：24名－30.4%で、障害者・児福祉分野への偏りはないものと考えた。

(3) 調査時期

2003年7月上旬

(4) 分析方法

障害のある人に対する意識・態度の学年における傾向をみるために、質問項目それぞれの回答毎に学年別の度数と比率を算出し、その差を χ^2 検定を用いて^{注2)}検定した。偏見9項目の結果を表1-1～1-9に、受容9項目の結果を表2-1～2-9に示す。

3 結 果

(1) 偏見的意識・態度

表1-1～1-9のとおり、偏見9項目の中で、統計的に有意な差がみられた項目は、「障害のある人はすべて施設に入所すべきである」($p<.05$)、「障害のある人は家庭や施設内で生活するだけでなく、なるべく外出する機会をもつべきだ」($p<.01$)、「自分の住む地域に障害者施設ができるのはよくない」($p<.05$)の3項目であった。

これを詳しくみると、「障害のある人はすべて施設に入所すべきである」で多いのは、4年生で「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」がほぼ並び立ち(43.0%、41.8%)、1年生では「あまりそう思わない」が群を抜いて(45.3%)いる。そして、「障害のある人は家庭や施設内で生活するだけでなく、なるべく外出する機会をもつべきだ」は、4年生が「とてもそう思う」、「ややそう思う」が同率で最も多い(41.8%)のに対し、1年生は「どちらかといえばそう思う」が最も多く(37.0%)になっている。また、「自分の住む地域に障害者施設ができるのはよくない」は、4年生では「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」がほとんどを占める(59.5%、32.5%)が、1年生では両者の比率が減り(46.3%、27.8%)、その分を「どちらかといえばそう思わない」が替わって(16.0%)いる。このことから、福祉系大学生の障害者観は、殊に、障害のある人への支援に関しては“共生”の考え方が1年生より4年生に多いといえる。とりもなおさずこの事実、大学の専門教育科目の授業を通して、4年生に、ノーマライゼーション・インクルージョンなどの理念が根づいてきていることを明示するものであろう。

表1-1 「障害のある人はすべて施設に入所すべきである」

回答 \ 学年	1年生 (%)	4年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=8.03$ (df=3) $p<.05$
とてもそう思う	1 (1.9)	1 (1.3)	2 (1.5)	
ややそう思う	3 (5.7)	0 (-)	3 (2.3)	
どちらかといえばそう思う	5 (9.4)	5 (6.3)	10 (7.6)	
どちらかといえばそう思わない	8 (15.1)	6 (7.6)	14 (10.6)	
あまりそう思わない	24 (45.3)	33 (41.8)	57 (43.2)	
まったくそう思わない	12 (22.6)	34 (43.0)	46 (34.8)	
計	53 (100.0・無回答1)	79 (100.0)	132 (100.0・無回答1)	

表 1-2 「障害のある人は暴力的であることが多い」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=7.50$ (df= 4) n.s
とてもそう思う	0 (-)	0 (-)	0 (-)	
ややそう思う	3 (5.6)	2 (2.5)	5 (3.8)	
どちらかといえばそう思う	6 (11.1)	13 (16.5)	19 (14.3)	
どちらかといえばそう思わない	12 (22.2)	20 (25.3)	32 (24.1)	
あまりそう思わない	16 (29.6)	33 (41.8)	49 (36.8)	
まったくそう思わない	17 (31.5)	11 (13.9)	28 (21.0)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	n.s

表 1-3 「障害のある人は家庭や施設内で生活するだけでなく、なるべく外出する機会をつくるべきだ」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=15.89$ (df= 2) p<.01
とてもそう思う	16 (29.6)	33 (41.8)	49 (36.8)	
ややそう思う	12 (22.2)	33 (41.8)	45 (33.8)	
どちらかといえばそう思う	20 (37.0)	10 (12.6)	30 (22.6)	
どちらかといえばそう思わない	4 (7.4)	2 (2.5)	6 (4.4)	
あまりそう思わない	1 (1.9)	0 (-)	1 (0.8)	
まったくそう思わない	1 (1.9)	1 (1.3)	2 (1.5)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	p<.01

表 1-4 「障害のある人はとっつきにくいと感じる」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=4.10$ (df= 3) n.s
とてもそう思う	1 (1.9)	2 (2.5)	3 (2.3)	
ややそう思う	6 (11.1)	10 (12.7)	16 (12.0)	
どちらかといえばそう思う	21 (38.1)	18 (22.8)	39 (29.3)	
どちらかといえばそう思わない	13 (24.1)	23 (29.1)	36 (27.1)	
あまりそう思わない	10 (18.5)	19 (24.1)	29 (21.8)	
まったくそう思わない	3 (5.5)	7 (8.8)	10 (7.5)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	n.s

表 1-5 「障害は不治の病ではない」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=1.72$ (df= 5) n.s
とてもそう思う	9 (16.7)	13 (16.6)	22 (16.7)	
ややそう思う	9 (16.7)	18 (23.1)	27 (20.4)	
どちらかといえばそう思う	15 (27.7)	17 (21.8)	32 (24.2)	
どちらかといえばそう思わない	9 (16.7)	16 (20.5)	25 (18.9)	
あまりそう思わない	9 (16.7)	11 (14.1)	20 (15.2)	
まったくそう思わない	3 (5.5)	3 (3.9)	6 (4.6)	
計	54 (100.0)	78 (100.0・無回答 1)	132 (100.0・無回答 1)	n.s

表 1-6 「障害のある人は社会生活を営むのが難しい」

学年 回答	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=2.67$ (df= 3) n.s
とてもそう思う	5 (9.3)	5 (6.3)	10 (7.5)	
ややそう思う	17 (31.5)	18 (22.8)	35 (26.3)	
どちらかといえばそう思う	19 (35.1)	28 (35.4)	47 (35.3)	
どちらかといえばそう思わない	7 (12.9)	14 (17.7)	21 (15.8)	
あまりそう思わない	5 (9.3)	10 (12.7)	15 (11.3)	
まったくそう思わない	1 (1.9)	4 (5.1)	5 (3.8)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	n.s

表 1-7 「障害のある人は結婚が可能である」

学年 回答	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=0.69$ (df= 3) n.s
とてもそう思う	31 (57.4)	42 (53.8)	73 (55.3)	
ややそう思う	11 (20.3)	20 (25.6)	31 (23.5)	
どちらかといえばそう思う	7 (13.0)	8 (10.3)	15 (11.4)	
どちらかといえばそう思わない	2 (3.7)	5 (6.4)	7 (5.3)	
あまりそう思わない	2 (3.7)	2 (2.6)	4 (3.0)	
まったくそう思わない	1 (1.9)	1 (1.3)	2 (1.5)	
計	54 (100.0)	78 (100.0・無回答 1)	132 (100.0・無回答 1)	n.s

表 1-8 「障害のある人は社会生活を送れるなら、入所の必要はない」

学年 回答	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=1.34$ (df= 3) n.s
とてもそう思う	23 (42.5)	38 (48.1)	61 (45.9)	
ややそう思う	14 (25.9)	18 (22.8)	32 (24.1)	
どちらかといえばそう思う	10 (18.5)	10 (12.6)	20 (15.0)	
どちらかといえばそう思わない	3 (5.6)	9 (11.4)	12 (9.0)	
あまりそう思わない	3 (5.6)	3 (3.8)	6 (4.5)	
まったくそう思わない	1 (1.9)	1 (1.3)	2 (1.5)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	n.s

表 1-9 「自分の住む地域に障害者施設ができるのはよくない」

学年 回答	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=8.49$ (df= 2) p<.05
とてもそう思う	0 (-)	1 (1.3)	1 (0.8)	
ややそう思う	2 (3.7)	1 (1.3)	3 (2.3)	
どちらかといえばそう思う	3 (5.6)	2 (2.5)	5 (3.7)	
どちらかといえばそう思わない	9 (16.0)	2 (2.5)	11 (8.3)	
あまりそう思わない	15 (27.8)	26 (32.9)	41 (30.8)	
まったくそう思わない	25 (46.3)	47 (59.5)	72 (54.1)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	p<.05

(2) 受容的意識・態度

一方、表2-1～2-9のとおり、受容のほうは、9項目のうちの5項目において統計的に有意差が認められた。それらを個々にみていくと、まず、「障害のある人と同じ職場で働くのに躊躇しない」($p < .05$)は、4年生で最も多いのが「ややそう思う」、続いて「どちらかといえばそう思う」で(27.8%、24.1%)あり、1年生で最も多いのは「どちらかといえばそう思う」で、続いて「どちらかといえばそう思わない」となっている(35.2%、27.8%)いる。「電車やバスの中で障害のある人らしい人を見ると、冷たい目で見てしまう」($p < .01$)では、4年生は「まったくそう思わない」と「あまりそう思わない」が順に凌ぎ(36.7%、34.2%)、1年生は「どちらかといえばそう思わない」に(27.8%)、「あまりそう思わない」と「どちらかといえばそう思う」が同率で次いで(22.2%)

いる。「障害のある人と一緒に食事ができる」($p < .01$)は、4年生が「とてもそう思う」が断トツに多い(44.3%)の対し、1年生は「どちらかといえばそう思う」が最も多くなって(31.5%)いる。

「障害のある人やその家族に同情するけれども、できるだけ関わることは避けたい」($p < .05$)は、4年生で「まったくそう思わない」、「あまりそう思わない」がほぼ並んで多い(35.4%、32.9%)が、1年生は「どちらかといえばそう思わない」が際立って多くなって(37.0%)いる。最後に、「障害のある人と出会っても、自分が何をしたらいいかわからない」($p < .05$)は、4年生で「どちらかといえばそう思う」に、「ややそう思う」が続いて多く(35.4%、20.3%)、1年生では「とてもそう思う」が最も多くを占めて(33.3%)いる。この結果から、福祉系大学生の障害者観は、1年生より4年生において、現実の場面での障害のある人に対する

表2-1 「障害のある人と同じ職場で働くのに躊躇しない」

回答 \ 学年	1年生 (%)	4年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=11.54$ (df=5) $p < .05$
とてもそう思う	2 (3.7)	14 (17.7)	16 (12.0)	
ややそう思う	9 (16.7)	22 (27.8)	31 (23.3)	
どちらかといえばそう思う	19 (35.2)	19 (24.1)	38 (28.6)	
どちらかといえばそう思わない	15 (27.8)	12 (15.2)	27 (20.3)	
あまりそう思わない	8 (14.8)	9 (11.4)	17 (12.8)	
まったくそう思わない	1 (1.9)	3 (3.8)	4 (3.0)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	

表2-2 「国や地方公共団体は福祉施設に対してもっと費用を出すべきである」

回答 \ 学年	1年生 (%)	4年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=1.27$ (df=2) n.s
とてもそう思う	15 (27.8)	29 (37.1)	44 (33.3)	
ややそう思う	18 (33.3)	23 (29.5)	41 (31.0)	
どちらかといえばそう思う	14 (25.9)	21 (26.9)	35 (26.5)	
どちらかといえばそう思わない	4 (7.4)	2 (2.6)	6 (4.9)	
あまりそう思わない	3 (5.6)	2 (2.6)	5 (3.8)	
まったくそう思わない	0 (—)	1 (1.3)	1 (0.8)	
計	54 (100.0)	78 (100.0・無回答1)	132 (100.0・無回答1)	

表 2-3 「電車やバスの中で障害のある人らしい人を見ると、冷たい目で見てしまう」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=15.15$ (df=3) p<.01
とてもそう思う	1 (1.9)	0 (-)	1 (0.8)	
ややそう思う	5 (9.3)	0 (-)	5 (3.8)	
どちらかといえばそう思う	12 (22.2)	9 (11.4)	21 (15.8)	
どちらかといえばそう思わない	15 (27.8)	14 (17.7)	29 (21.8)	
あまりそう思わない	12 (22.2)	27 (34.2)	39 (29.3)	
まったくそう思わない	9 (16.6)	29 (36.7)	38 (28.5)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	p<.01

表 2-4 「障害のある人と友だちになれる」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=4.92$ (df=3) n.s
とてもそう思う	5 (9.3)	16 (20.3)	21 (15.8)	
ややそう思う	11 (20.3)	20 (25.3)	31 (23.3)	
どちらかといえばそう思う	22 (40.7)	29 (36.7)	51 (38.4)	
どちらかといえばそう思わない	9 (16.7)	9 (11.4)	18 (13.5)	
あまりそう思わない	5 (9.3)	5 (6.3)	10 (7.5)	
まったくそう思わない	2 (3.7)	0 (-)	2 (1.5)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	n.s

表 2-5 「障害のある人と一緒に食事ができる」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=13.97$ (df=3) p<.01
とてもそう思う	13 (24.0)	35 (44.3)	48 (36.1)	
ややそう思う	12 (22.2)	21 (26.6)	33 (24.8)	
どちらかといえばそう思う	17 (31.5)	20 (25.3)	37 (27.8)	
どちらかといえばそう思わない	9 (16.7)	3 (3.8)	12 (9.0)	
あまりそう思わない	3 (5.6)	0 (-)	3 (2.3)	
まったくそう思わない	0 (-)	0 (-)	0 (-)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	p<.01

表 2-6 「障害のある人と近所に住むのは避けたい」

回答 \ 学年	1 年生 (%)	4 年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=3.78$ (df=2) n.s
とてもそう思う	0 (-)	0 (-)	0 (-)	
ややそう思う	2 (3.8)	2 (2.5)	4 (3.0)	
どちらかといえばそう思う	8 (15.1)	5 (6.3)	13 (9.9)	
どちらかといえばそう思わない	6 (11.3)	6 (7.6)	12 (9.1)	
あまりそう思わない	17 (32.1)	34 (43.1)	51 (38.6)	
まったくそう思わない	20 (37.7)	32 (40.5)	52 (39.4)	
計	53 (100.0・無回答 1)	79 (100.0)	132 (100.0・無回答 1)	n.s

表2-7 「障害のある人やその家族に同情するけれども、できるだけ関わることは避けたい」

回答 \ 学年	1年生 (%)	4年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=9.32$ (df=4) p<.05
とてもそう思う	0 (-)	0 (-)	0 (-)	
ややそう思う	2 (3.7)	1 (1.3)	3 (2.3)	
どちらかといえばそう思う	9 (16.7)	8 (10.1)	17 (12.8)	
どちらかといえばそう思わない	20 (37.0)	16 (20.3)	36 (27.1)	
あまりそう思わない	13 (24.1)	26 (32.9)	39 (29.3)	
まったくそう思わない	10 (18.5)	28 (35.4)	38 (28.5)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	p<.05

表2-8 「障害のある人と出会っても、自分が何をしたらいいかわからない」

回答 \ 学年	1年生 (%)	4年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=12.36$ (df=4) p<.05
とてもそう思う	18 (33.3)	9 (11.4)	27 (20.3)	
ややそう思う	12 (22.2)	16 (20.3)	28 (21.1)	
どちらかといえばそう思う	12 (22.2)	28 (35.4)	40 (30.1)	
どちらかといえばそう思わない	7 (13.0)	9 (11.4)	16 (12.0)	
あまりそう思わない	3 (5.6)	9 (11.4)	12 (9.0)	
まったくそう思わない	2 (3.7)	8 (10.1)	10 (7.5)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	p<.05

表2-9 「障害のある人と結婚することができる」

回答 \ 学年	1年生 (%)	4年生 (%)	計 (%)	$\chi^2=5.43$ (df=4) n.s
とてもそう思う	1 (1.9)	6 (7.6)	7 (5.3)	
ややそう思う	1 (1.9)	7 (8.8)	8 (6.0)	
どちらかといえばそう思う	16 (29.6)	21 (26.6)	37 (27.8)	
どちらかといえばそう思わない	12 (22.2)	17 (21.5)	29 (21.8)	
あまりそう思わない	15 (27.8)	18 (22.8)	33 (24.8)	
まったくそう思わない	9 (16.6)	10 (12.7)	19 (14.3)	
計	54 (100.0)	79 (100.0)	133 (100.0)	n.s

自分の行動がイメージされにくいながらも、友好的、受容的な意識や態度がより顕著であることが明らかとなった。おそらく、こういった意識・態度の変容は、援助者としての“基本的技術”の学びに関係するのかもしれない。

4 考 察

結果の分析から明白なように、横断的検討という

限定はあるが、福祉系大学生の障害者観として偏見的意識・態度と受容的意識・態度のいずれも、学年差が認められた。すなわち、1年生より4年生において、障害のある人に対する「共生感」⁹⁾がより強く、受容度がより高い傾向にあった。この結果は、福祉系大学生の障害者観が、在学中に好意的方向、いわば、ノーマライゼーション・インクルージョンの方向へ変容していくことを明らかにしている。こ

の事実から、障害者観の変容要因の1つに大学の授業における“説得効果”が挙げられるが、ひるがえって、授業を行う側は、事例を選び出す際、それらの事例がある障害者観の形成に寄与する危うさ¹⁰⁾も心に留めておかねばならないと思われる。

徳田¹¹⁾は、障害のある人に対する理解を5段階に区分し、その第5段階として受容的行動の段階—自分たちの生活する社会に障害のある人が参加することを当然のように受け入れ、また、障害のある人に対する援助行動が自然に現れる段階—を位置づけている。この受容的行動の段階に到達することこそが、“障害は個性”という障害者観を確立することそのものであると考えられる。そして、石渡¹²⁾は、“障害は個性”という障害者観の確立に向けて、「差別・偏見を取り除くための第一歩は、『共に生きる』ことを体験することだと思います。学ぶにしろ、働くにしろ、同じ場で活動を共にした人たちは、

障害者を自分と何ら変わらない存在なのだということを実感していきます。これは特に、自発的なふれあいの場であるボランティア活動などで顕著です」と言及する。この言辞に併せて態度の感情・認知・行動の3成分を鑑みると、個々人の障害者観は、自ら感じ、知る体験を基礎にして、行動レベルまでの変容がなされることが必要である。したがって、大学の授業や課外においては、学生個々人の障害者観の変容を確かなものとするために、さらなる適正な方向付けと適切なサポートが求められると思われる。

以上のとおり、本研究によって、福祉系大学生の障害者観は、在学中、好意的方向へ変容することが明らかになった。今後は、この変容の様相を縦断的に明らかにしていくことが本研究の課題であり、同時に、どのような体験が効果を及ぼすかを明らかにしなければならないと考える。

注

- 1) 総理府 編 (1995) 障害者白書 バリアフリー社会をめざして 平成7年版、大蔵省印刷局、東京：3～12
- 2) χ^2 検定は、理論度数5以下 (>1) のマス目が20%以下の時はそのまま、それ以外はマスを合理的に合併して用いた〔住田幸次郎 著 (1988) 初歩の心理教育統計法、初版、ナカニシヤ出版、京都：188〕。

追 記

本拙稿は、第一著者のゼミ2003〈平成15〉年度卒業生・吉田相美さん、川崎 彩さんの卒業論文のデータ（一部）をまとめなおしたものである。

引用文献

- 1) 丸山一郎 (2001) 11 障害をもつ人の地域活動 三ツ木任一 「障害者福祉」、初版、財団法人 放送大学教育振興会、東京：135、135～149
- 2) 総理府 編 (1995) 障害者白書 バリアフリー社会をめざして 平成7年版、大蔵省印刷局、東京：5、11
- 3) 日比野清 (2003) 第12章 2 生活環境の改善とバリアフリーの街づくり 山口洋史 編著 「障害者福祉論」、初版、コレール社、東京：198、197～205

- 4) 石渡和美 (1997) Q&A 障害者問題の基礎知識、初版、明石書店、東京：38、229
- 5) 徳永 豊 (2001) 第Ⅰ部2 世界の情勢と今後の課題 ―障害のある子どもの教育を支える考え方― 昇地勝人・蘭香代子・長野恵子・吉川昌子 編 「障害特性の理解と発達援助 教育・心理・福祉のためのエッセンス」、初版、ナカニシヤ出版、京都：18～19、17～30
- 6) 前掲5)：18～19
- 7) 三ツ木任位一 (2001) 15 障害者福祉の展望 三ツ木任一 「障害者福祉」、初版、財団法人 放送大学教育振興会、東京：221、215～232
- 8) 浅井暢子 (1999) 精神障害者に対する意識と受容 日本社会心理学会第40回大会発表論文集、慶應義塾大学：235、234～235
- 9) 齋場三十四 著 (1999) バリアフリー社会の創造、初版、明石書店、東京：45
- 10) 三島亜紀子 (2005) 第8章 誘いの受け方、断り方 社会福祉実習指導の問題点 倉本智明 編著 「セクシュアリティの障害学」、初版、明石書店、東京：278～279、268～294
- 11) 徳田克己 (1998) 第Ⅷ章 福祉教育の心理 佐藤泰正・山根律子 編著 「福祉心理学」、初版、学芸図書株式会社、東京：174～175、168～179
- 12) 前掲4)：228～229